

# SHOW MEY シネマルーム

★★★

## Data

監督・脚本：ジャスティン・ケリー  
原作・脚本：サヴァンナ・クヌーブ  
出演：クリステン・スチュワート/  
ローラ・ダーン/ジム・スタ  
ージェス/ダイアン・クルー  
ガー/コートニー・ラヴ

## ふたりの J・T・リロイ ベストセラー作家の裏の裏

2018年/アメリカ映画  
配給：ポニーキャニオン/108分

2020 (令和2) 年 2 月 24 日鑑賞

テアトル梅田

### ■ショートコメント■

◆日本では、「交響曲第1番《HIROSHIMA》」を作曲した全聾の作曲家「佐村河内守事件」が2014年に世間の注目を浴びた。2012年11月9日の『情報LIVE ただいま!』で彼の特集を組んだNHKは、まんまと彼に騙されていたわけだ。それに対して、2000年代半ばに一大スキャンダルとなった美少年作家J・T・リロイ事件とは? 「Based on a true lie.」とうたわれた本作は、そんな実話をどう映画化するの?

◆チラシによると、本作のイントロダクションは次のとおりだ。

<p>アメリカ文壇に彗星のごとく登場し、世界的なセレブリティやアーティストから熱烈に支持された美少年作家J・T・リロイ。「サラ、いつもの折り」の原作者としてカンヌ国際映画祭でも脚光を浴びた彼は、ふたりの女性が振り上げた架空の人物だった? 2000年代半ばに一大スキャンダルとなったこの事件について、初めてJ・Tの分身を担ったサヴァンナの視点から映画化。彼女は、なぜローラに言われるがまま数年間もJ・Tを演じ続けたのか——?</p> <p>最初は小さな嘘だったが、何度も演じるうちに(架空)が(リアル)を超え、サヴァンナ自身もJ・Tと一体化していく。ローラの操り人形に過ぎなかったサヴァンナが、ひとりで歩き出す瞬間はスリリングであり、セレブリティまでもがあっさり騙されるころは痛快でもあ</p>	<p>る。そんな驚くべき経験をするサヴァンナの心情が繊細かつドラマティックに描かれる本作は、まだ何ものでもなかった10代の彼女が悩みながら自分の道を見つけるまでのカミング・オブ・エイジ・ムービーであり、切ないラブストーリーでもある。“世間を欺いた大胆不敵な女性”のイメージからは程遠いその姿に共感を覚え、心揺さぶられることだろう。</p> <p>『トワイライト』シリーズや『チャーリーズ・エンジェル』のクリステン・スチュワートが、『スター・ウォーズ/最後のジェダイ』のローラ・ダーン、「女は二度決断する」のダイアン・クルーガーと競演し、『ワン・デイ 23年のラブストーリー』のジム・スタージェス、J・Tの友人でもあった『ラリー・フrint』のコートニー・ラヴも出演。</p>
--	---

◆また、チラシによると、本作のストーリーは次のとおりだ。

サンフランシスコ。親元を離れたサヴァンナは、兄のパートナーで作家のローラと出会う。ローラは自分の小説をJ・T・リロイという架空の美少年名義で出版、ベストセラーになっていた。そんなローラに頼まれ、最初は遊び半分で男装し、J・Tに扮するサヴァンナ。やがて小説の映画化が決まり、ハリウッドやカンヌで大勢の観衆の前に出るうちに、J・Tとして出会った相手に本気で恋してしまうが……。

◆私がかもともと本作に興味を持てなかつたのは、美少年作家J・T・リロイが書き、ベストセラーになつたという小説（のすばらしさ）を全く知らなかつたため。本作に断片的に登場するそのくだりを聞いていても、そんなに魅力的な小説とは思えない。そのため、その美少年の姿をはじめて目で見た時の彼のファンや、彼の信奉者で、フランスに住む女性エヴァ（ダイアン・クルーガー）の感動も私にはサツパリわからない。また、既に70歳を超えた私には、スクリーン上に見る美少年（？）サヴァンナ（クリステン・スチュワート）の姿にも格別のときめきを覚えないから、この手の映画は最初からパスすべきだったかも・・・？

◆佐村河内守は、コトがバレた後は奈落の人生しかなかつた。しかし、彼のゴーストライターとして18年間も彼の代作をしていた新垣隆氏には新たな人生が開け一時はマスコミの寵児になつたから、世の中は面白い。それと同じように、本作でも、コトがバレて一貫の終わりと思つたはずのローラ（ローラ・ダーン）にも、1年後には意外な復活が訪れるから、この中年女のしたたかさにビックリ！

2020（令和2）年2月28日記